

小池 聡 ； 須羽 新二 ； 野間 晴雄

1. はじめに

本稿は、東北タイ農村・ドンデーン村の日常生活において村人が時間という一種の「資源」をどのような行動に、どれだけ割当ててゐるかを定量的に分析しようとする試みである。このような調査は一般に生活時間調査といわれる。

生活時間調査は調査と処理に膨大な手間を要するため、その重要性は指摘されながらも実際の事例はわずかである。ひとつの例として、NHKが1960年以来5年ごとに実施している「国民生活時間調査」があげられる。これは、個人のとった行動を15分ごとに2週間のうち6日間記録するもので、最新の調査では全国でのべ6万人以上を対象としている[NHK放送世論調査所 1981]。この他に、都市社会学における「生活構造論」[青井他 1971]、地理学の新しい流れである「タイム・ジオグラフィー」[Carlstein 1982]、生態人類学での「インプット・アウトプット分析」[Johnson 1978]、子供の社会化に関する「六文化プロジェクト」[Whiting & Whiting 1975]、経済学の新しい分野である「ニュー・ハウスエコノミー」[Binswanger et al. 1980]などにおいて生活時間調査の手法が用いられている。

上にあげた各分野の生活時間調査は、目的、対象、規模、方法をそれぞれ異にするが、ある一定の時点における母集団の特定の生活行動での時間利用を知るために、多くのサンプルをとり統計的方法を用いる点に共通性がある。しかし、われわれがとった方法はこれらとはまったく異なる性格を持っている。

ドンデーン村での生活時間調査は、農民の生活行動を時間軸上に投影させ、その包括的な実態を浮かび上げようとする意図をもっている。そのため、離散した特定時点での生活行動を切り取るのではなく、長期にわたる継続的な調査を行った。また、本調査では稲作、家事労働などというカテゴリーをあらかじめ設けて、被調査者の行動をそれらに振り分けるのではなく、個々の行動の種類をできるだけ具体的に記録し、解析の段階ではじめて分類する方法をとった。その結果、生活行動は533種にのぼる。

このような方法をとるとすれば、おのずからサンプル数は限定せざるをえない。しかし、サンプル数を限定したところで生活行動に関する情報量は膨大であるので、その解析にはコンピューターを利用した⁽¹⁾。本稿では、農家生活の季節性と世帯内分業という二つの視点からの分析例を提示する。

2. 調査の概要

調査は1981年と1983年の2回行った。調査期間は、81年調査では8月5日から12月20日までの138日、83年調査では7月13日から翌年の3月13日までの245日である。前者は稲作期間中に限定されるが、後者は乾季の農閑期を含んでいる。サンプル数は、81年調査が4世帯22人、83年調査が5世帯23人である。なお、ここでの分析は主に83年調査でのサンプル農家を対象としている。サンプル農家は、ドンデーン村の研究計画全体の方針にしたがって集落近くの一水田圃地であるノングシムバーン内で水田を経営する者の中から選ばれた。サンプルにはさまざまな経済状態の農家が含まれるように配慮されている。

調査は次のような方法によって行われた。サンプル農家構成員の日々の行動は、各世帯から選択された一名によって調査票上に記録される。調査票は、まず睡眠しか考えられないような時間帯では細かな記入が必要でないように、そうでない時間帯では細かな記入ができるようにレイアウトされている。83年調査の場合、記録は10分単位でなされた。行動は「何を」（行動内容）のほかに「どこで」（行動空間）、「だれと」の点からも記録されたが、今回の分析では、主に行動内容そして一部で行動空間に関する情報を用いた。

83年調査の全期間を通じてのサンプル全体（5世帯20人⁽²⁾）の平均的な時間配分の概要は次の通りであった。

睡眠	8'58"
食事	2'23"
その他の生理的必要	1'20"
生理的必要時間計	12'42"
休息・娯楽	3'09"
労働（学生、幼児を除く）	7'07"

家事を除く労働時間の中では稲作が最も重要で、職業労働時間の23.2%を占める。以下賃金労働、家畜飼育、野菜作、手仕事、自営業、魚取り、畑作の順である。しかしこの序列は世帯の生業構造によって大きな差がある。以下に労働時間の世帯間差を中心にしながらサンプル農家の概要を述べる。

1) チナウォン家 (1-2) ⁽³⁾

世帯主夫婦（夫75歳、妻74歳）、その末娘夫婦（夫28歳、妻30歳）、末娘の子供（長男8歳、長女3歳）の三世代からなる6人家族である。世帯主夫婦は農業から引退しており、現在は世帯主はおもに竹細工、妻は子守などを家で行っている。農業は末娘夫婦が主となって行う。農業（経営面積は水田6ライ、畑地5.75ライ、菜園1ライ）のなかでは野菜作に重点が置かれており、主な現金収入源は野菜の売上げである。いわゆる専業農家であり、農業以外からの収入はほとんどない。野菜作と手仕事への労働時間投入はサンプル農家のなかで最も多く、両者のそれぞれは稲作の労働時間より大

きい。

2) バクバン家 (42-21)

前世帯主であった母親が調査前(1983年4月)に死亡したので、その子である未婚の姉妹2人(42歳, 31歳)が現在の世帯員である。この姉妹の妹は結婚しており、すぐ隣に世帯を構えている。この世帯と共働・共食⁽⁴⁾の関係にあるので、その経済状態を世帯単位で厳密に把握することはむずかしい。しかし、この姉妹がそれほど豊かな暮らしをしていないのは事実である。稲作(31ライ経営)と自家消費用の野菜作(0.5ライ経営)のみを行い、

農耕にはおもに姉が従事している。妹(同居)が不定期に建設作業員としてマハサラカム県コスムピサイ郡に働きに出るのが唯一の現金収入源である。労働時間は賃金労働が最も多く、家畜飼育、稲作と続くが、他はこれらに比べるとかなり少ない。

3) ダンサイ家 (44-156)

夫婦(夫37歳, 妻32歳)とその子供2人(長男8歳, 長女6歳)によって構成されている。この世代にしては広い水田(26ライ経営⁽⁵⁾)を親族(夫の父方および母方)と共同耕作している。畑作、野菜作はサンプル農家の平均程度に行っており(畑地8ライ経営, 菜園3.75ライ経営)、そののみにより現金を獲得している。稲作の労働時間はサンプル農家のなかでいちばん多く、典型的な専業農家である。

4) チェンタバン家 (72-57)

夫婦(夫54歳, 妻49歳)と子供3人(長男25歳, 三男20歳, 四男14歳)の5人からなる。長男はすでに教育を終えており、生産活動に従事している。世帯主は1964年設立の当初から東北地域農業センターで働いており、現在は夜警である⁽⁶⁾。農業(稲作, 畑作, 野菜作, 家畜飼育)のほか、1981年よりよろず屋を開業している。農業の規模も村の平均以上であるが(経営面積は水田20ライ, 畑地5ライ, 菜園1.5ライ)、現金収入がきわめて多く、村でも上層に位置する。賃金労働, 自営業に投入される時間が他の世帯より大きい。稲作, 野菜作にもサンプル農家の平均以上の時間が費やされている。

5) ラートロンムアン家 (174-106)

夫婦(夫48歳, 妻41歳)と子供4人(男24歳, 男19歳, 男14歳, 女8歳)の6人世帯である。小学校教師である長男はブラユン郡までかよっており、他の子供はまだ学生である。現金獲得に熱心な世帯主は、これまでに理髪業、とい作り、ミニバス経営、精米業など数々の職業に就いてきた。その結果、

村内ではかなりの経済的地位にあり、比較的若いにもかかわらず、前村長が公金私物化の問題で辞職後の1983年村長に選ばれた。現在、この世帯は稲作(10ライ経営), 畑作(11ライ経営), 野菜作(0.75ライ経営)のほかには豚の飼育と精米業を営んでいる。また、世帯主は村長の仕事で多忙である⁽⁷⁾。時間利用の面からみると、労働力が多く様々な生業にまんべんなく

時間が費やされており、自営業と賃金労働の両方にかかわっている点でチャンタバン家と似ている。

3. 農家生活の季節性

一般的に農家生活は農作業との関連で一年を周期として営まれる。ドンデーン村の季節変化は、雨季と乾季の存在によって特徴づけられる。まったく天水に依存する稲作は、雨季の到来を待って始まり（7月）、乾季の刈取（11月～12月）によって終わる。ドンデーン村農民の一年が雨季の到来と稲作の開始によってはじまるとすれば、83年7月13日～84年3月13日の調査では稲作における苗代づくりや一回目の耕起を捉えていないため、農家生活の重要な局面をのがしていることになる。また、翌年の雨季の到来まで継続していない。しかし、調査は田植以降、稲刈後である乾季の半ばまで行われたので、農家生活の季節性という視点からの分析に十分耐えうると考えられる。分析の時間単位は旬別である。

この節ではサンプル農家のうちチナウォン家、ダンサイ家、チャンタバン家の3世帯をとりあげた。図1, 2, 3に、3世帯における稲作、野菜作、畑作労働時間の旬別変動⁽⁷⁾を示す。3世帯に共通して、稲作労働時間における二つのピークがみられる。作業内容からみると、第一のピークは耕起、しろかき、苗取、田植から、第二のピークは刈取、脱穀から構成される。ピーク間には2～3カ月の期間があり、10月末に時期的にはずれた刈取がみられることを除けば、目立った作業は行われていない。

ピーク時には、基幹労働者が平均して一日8時間以上を稲作労働に投入しなければならない旬がみられる。基幹労働者が一日のうち8時間以上を稲作に使えば、農家は他の生業に多くの時間を投入することはできない。その時期、農家は稲作にかかりきらねばならない。ただし、チャンタバン家における第一のピーク時にそのような旬は存在しない。これは、長男が農業労働者として働きに出ていたからである⁽⁹⁾。ここには、稲作労働が他の労働に常に優先するとはかぎらない側面が存在する。ドンデーン村では賃金雇用機会が増大し、農家において兼業化が進行しているから、この側面は今後より顕著になると思われる。

稲刈後の乾季では野菜作が主な作物生産活動になっている。乾季に野菜を栽培するときには水やりが不可欠で、それはこの3世帯では1月以降毎日のように行われる。乾季の水やりは、桶にいった水を川からかついであるので非常に時間と労力のいる仕事である。しかし必ずしも野菜作労働が乾季に集中しているとはいえない。

図にあげたいずれの世帯でも、トウガラシを含めた野菜収穫がほぼ全調査期間にわたってみられ、園地には年間を通じて常に何らかの作物が植えられていると考えられる。野菜作労働には稲作ほど季節性がない。これは野菜作が年間を通じてのコンスタントな現金獲得手段であることに関連する。事実、チナウォン家、ダンサイ家の妻は、調査期間中ほぼ毎月、収穫

した野菜を売りに出かけている。

野菜の作付は稲の収穫、脱穀に忙しい時期を避ける形でその前後に共通して見られる（10月下旬、12月下旬）。作付はそれ以外の時期（7月上旬、9月上旬）にも行われ、野菜作労働のピークは乾季で朝夕の水やりに忙しい時期（1月以降）を除けば、作付の時期と一致していることが多い。そのピークは稲作ほど大きくない（図1、2、3）。

サンプル農家の畑作労働時間はもっぱらキャサバ栽培に費やされたものである。チナウォン家、ダンサイ家、チャンタバン家でキャサバの植付は、それぞれ7月中旬、10月中旬、11月上旬に行われ（その収穫は調査終了後）、ダンサイ家、チャンタバン家では植付の約1ヶ月前に前年度分の収穫が行われている。キャサバ栽培に投入される労働量のピークはきわめて小さい。サンプル農家3世帯の畑地経営面積はドンデーン村の平均6.07ライ（1981年）と同水準である。ドンデーン村においてもキャサバは粗放な方法で栽培されており、ここでとりあげた農家は上記の時期を除くとまったくキャサバ栽培に従事していないといっている⁽¹⁰⁾。

稲作、野菜作、畑作労働時間の合計、つまり作物生産労働時間の季節的パターンは、稲作のみのそれとほぼ同様の傾向を示す。これは一時的な労働需要が大きい稲作労働時間に対し、野菜作、畑作がそれほどのピークをほとんどもたないためである。

農事が少ないとき、農家の基幹労働者の男性は魚取り、そして女性は織物などの手仕事により多くの時間を投入する傾向が、自営業・賃金労働にかかわりのないチナウォン家、ダンサイ家でみられる（図4、5）。また、他世帯の稲作作業が終了していないときには、それを手伝いに行ったり、雇われて行ったりする。

ドンデーン村では賃金雇用機会が増大しており、とくに季節的な就業は稲刈後の乾季に多い。たとえば、チャンタバン家の長男は、稲刈と脱穀が終わったあと、1984年1月から建設労働者として働きに出ており、1月にはその仕事に一日平均8時間を投入している。もちろん、魚取りはまったく行っていない。また、同じ世帯の妻は、自宅でよろず屋を営み、商品の仕入・販売に時間を費やしている。調査期間を通じてみると、よろず屋経営についての労働時間の約6割は、1984年の1、2月の二ヶ月間に集中しているから、このよろず屋経営は上記の季節的賃金労働と似た機能をもつと考えられる。

3世帯の全基幹労働者をみるかぎり、稲刈後1984年の1、2月において一日平均5時間以上が使われている労働には、上記の季節的賃金労働とよろず屋経営以外にチャンタバン家の世帯主が従事する年間を通じての賃金労働しかない（脚注5参照）。

チナウォン家、ダンサイ家の基幹労働者についてみると、作物生産活動がひまになると、魚取り、手仕事といった労働により時間が投入される傾向がある。しかし、それらはとくに稲作がもつような連続的な労働を要求

しない。したがって、家事労働時間、放牧時間⁽¹¹⁾を除く一日平均の全労働時間（旬別）は作物生産活動がひまな時期で相対的に低い値を示すことが多い（図4, 図5）。たとえば、チナウォン家の夫について、1984年1～2月における日労働時間の変動をとらえたのが図6である。60日間のうち労働時間が8時間以上の日は25日あり、たいていは魚取りに出かけた日である。魚取りにまったく出かけなかった旬はない。しかし、全体としてみると一日当りの労働時間のばらつきが大きく、平均労働時間の減少を結果している。

全労働時間の減少は余暇時間の増加を意味している（図4, 5）。余暇時間には宗教的色彩の強いものを含めて行事への参加時間が含まれ、行事の頻度は農閑期に高くなる。上にあげたチナウォン家の夫の場合、行事への参加が集中してみられるのは1984年1～2月であり、行事があった日の労働時間はたいてい4時間以下である。行事への参加が単なるひまつぶしではなく、社会的・文化的に必要とされるものであるなら、余暇時間の季節的増加もそのような意味において解釈されねばならない。

家畜飼育労働の多くは、時間消費の点からみると水牛の放牧である。放牧は集約度の低い労働であり、作物生産活動をしながらか行われることも多い。作物生産活動がひまになってくると、基幹労働者が他の仕事をせず放牧のみをしている時間が大きくなる傾向がある（図7）。その場合の放牧は休息に近い労働と解釈できるので、作物生産活動がひまな時期は農業全体についてもひまな時期となっているといえる。また、図7に示したダンサイ家の妻の場合、作物生産活動がひまになってくると家事労働時間が増える傾向がある。作物生産活動のピーク時における家事労働時間は、調査期間中で最低の1.5時間を示している。これが農家の日々の生活上、妻に割り当てられる最小限の家事労働時間とすれば、作物生産活動がひまな時期における家事労働時間の増加は、家事労働の一部分が、魚取り、手仕事などと同様に、作物生産活動による労働配分の谷をうめる労働としての意味をもつことを示している。

以上に述べたチナウォン家、ダンサイ家では、農家生活の時期的変化が稲作を中心とする作物生産活動によって形づくられる側面が強い。ところが、基幹労働者すべてが賃金労働もしくは自営業に關与するチャンタバン家では事情が異なる。世帯主の妻と長男の場合、全労働時間の時期的変動と作物生産活動の繁・閑との対応がより明確でなくなっている。これは、とくに1月において、よろず屋、季節農業労働という一日平均8時間を投入する就業をもっていたためである。また、世帯主の場合は、全労働時間が作物生産活動の繁・閑に対応して変動しているが、一日8時間の賃金労働をベースとして置いているため、ここでとりあげた農民の水準からいうと調査期間を通じて全労働時間がきわめて高くなっている。1983年12月での一日平均全労働時間は12.5時間にもなる。

なお、調査が行われた1983年は、順調な降雨に恵まれた米の大豊作年であった。前述のように農家生活は稲作を中心に営まれるから、不安定な

降雨条件によって洪水・旱魃が発生した年の農家生活は、以上の記述とは様相を異にするものであると考えられる。

4. 世帯内分業

(1) チナウォン家における成員間の労働配分

ここでは農業を主な収入源とする三世代家族のチナウォン家に焦点をあてる。チナウォン家は、前述のように世帯主夫婦(夫75歳,妻74歳)、その末娘夫婦(夫28歳,妻30歳)、末娘の子供二人から成るが、世帯主夫婦が農業より引退しているため、実際の仕事は末娘夫婦が中心となっている。よって役割の面から見るとその成員は、夫(主生計維持者)、妻、子供、老人という四つの役割から構成されていることになる。

夫と妻が、この世帯の基幹労働力を構成する。夫の労働の中で最も時間が投入されているのは稲作であり、魚取り、野菜作がこれについている。夫はその他の労働(家畜飼育、畑作など)も行うが、稲作、魚取り、野菜作と比較すると労働時間は少なくなる。妻の場合、家事労働への時間配分が最も大きく、稲作、野菜作がこれについている。老人は世帯の主な労働過程から引退しており、子供はまだ労働力の準備段階にある。したがって、老人の場合、体力を必要としない手仕事、家事、農作業の手伝い、その補助的作業(放牧など)、子供の場合は、家事、農作業の手伝い、その補助的作業をする程度である。

図8に示したこの世帯の生業ごとの成員間労働配分は、次のようにまとめることができる。稲作はほとんどすべて夫と妻によって行われ、また両者はほぼ等しい時間を稲作に投入している。野菜栽培も主として夫と妻とで営まれているが、老人(男性)の労働力も無視できない。家畜飼育での作業は具体的にはほとんどが放牧であり、主に老人、子供の仕事である。ただし、前節で述べたように、主生計維持者である夫も作物生産がひまなときには放牧に従事するため、老人、子供とほぼ等しい時間を費やしている。手仕事には作物生産がひまなとき妻もかかわるが、年間を遥じてそれを行う老人の労働時間が圧倒的に大きい。魚取りは稲刈後の乾季における夫の主な仕事となる。また、世帯全体での労働時間は小さいが、畑作は主に夫によって行われ、自然物の捕獲・採集には全成員が等しくかかわっている。家事労働の半分は妻により行われ、老人(女性)がそれを助ける形をとる。老人が行う家事労働は家の中での軽作業である。

(2) 稲作生産と夫と妻との分業

以上に述べたように、チナウォン家の稲作は、中心的な労働力としての末娘の夫とその妻がほぼ等しい時間を投入することによって営まれている。ここでは、稲作生産の具体的な様相を作業のプロセスにしたがって記述し、夫と妻との分業関係、共同労働の実態を明らかにする。

表1、表2は、夫が特定の作業をしているとき、妻がどのような作業に

かがわっていたかを示している。各列、各行の合計値は、それぞれ夫、妻がその作業に使用した時間量を示す。「その他」に示された値は、夫、妻のどちらか一方が、ある作業を行っているとき、もう一方が稲作労働以外の行動をしている時間である。全体としては、夫、妻の両者が同時に稲作にかかわっている時間は、どちらか一方が稲作をしている時間の約1.5倍である。そのとき、夫と妻とは、妻が水田へ食事を運んでいる場合などを除き、共にロングシムバーンの水田で働いている。夫のみが稲作をしているとき、妻は家事労働に最も時間を費やしている。日々の生活上必要とされる家事は妻の役割である。実際、稲作のピークがあった8月と11月では、朝食より前に夫が稲作をすることが頻繁にみられるのに対し、妻はそのとき専ら家事にかかわっている。

田植は、7月25日から28日の3日間、7月30日から8月10日までの12日間、そして時期的に少し離れて8月22日に行われた。調査開始(7月13日)以前に、ロングシムバーンで田植活動はあまりみられないから、チナウォン家の田植は約10日間に集中している。また、表1からわかるように、田植は夫と妻とが共同で行う。耕起、しろかき、そしてあぜの修復は夫の仕事、苗取は妻の仕事である。作業プロセス上では田植の前段階にある耕起(2回目)、しろかき、苗取は、田植とほとんど同時進行している。耕起、しろかき、苗取が行われたのと同じ日に、田植が行われる。そして、夫が耕起、しろかきをしているとき、妻が水田で行う作業は苗取である。つまり、田植の時期では、一日のうちに田植を中心として耕起、しろかき、苗取が行われ、夫と妻とが同じ作業(田植)を行う時間と別々の作業を行う時間が見られる。

刈取った稲を結束するのに必要な竹ひもを作るのは夫の仕事である。夫が竹ひもを作っているとき、妻は稲作以外の行動をとることが多いが、稲を倒伏させ、刈取を容易にさせる作業も行っている。刈取はほとんど夫と妻とが共同で行う。刈取の期間は、10月24日から27日と11月16日から12月11日である。刈取の期間中に、夫は刈取った稲を結束する。束ねられた稲は、夫が10月末の刈取直後に準備した脱穀場(整地後、水牛のフンを塗るかためる)へ運搬される。この作業には夫と妻の両者がかかわるが、共同で行われることは少ない。たとえば、夫が脱穀をしているとき、妻が刈取った稲を運搬していることがある。しかし、この運搬作業に最も時間が使われるのは、両者ともに刈取期間直後の12月12日である。脱穀は刈取期間中にも行うが、本格的な作業は、12月13日から18日の6日間にみられ、夫のみが従事する。また、表2からわかるように、夫が脱穀をしているとき妻はその補助的な作業、つまり、上記の刈取った稲の運搬、結束した稲を解く作業、種籾の選別に従事していることが多い。

脱穀によって得られた籾は、運搬され米倉に収納される。この作業は、脱穀期間の直後に夫のみで行われている。それが終わると、夫は残された藁を結束し、水牛の飼料として水田に集積する作業を行う。その間、妻はチナウォン家以外の水田で働くことはあっても、夫と経営水田の耕作に従

事することはほとんどない。

夫と妻との稲作生産における分業、共同労働についてはほぼ同様のことがダンサイ家でもいえる。この世帯は夫婦(夫37歳,妻32歳)と年少の子供2人から構成され、チナウォン家と同じく稲作は夫と妻とがほぼ等しい時間を投入することにより営まれる。夫と妻の時間量の比率は53:47である。ただし、水田経営面積がチナウォン家に比べ大きいため、より多くの時間が消費されている。

ところで、ダンサイ家は、チナウォン家と異なりノングシムバーン以外にノングドゥーンでも水田を経営している。しかし、夫と妻が2ヶ所の水田で別々に作業をすることは稀であり、同じ場所で共に働くことが多い。たとえば、田植、刈取は夫と妻による共同作業である。ダンサイ家の田植は1983年7月23日から9月3日まで、ほぼ毎日連続してみられるが、ノングシムバーンでは8月4～8日、13～17日、19～31日、9月2日～3日に、ノングドゥーンでは7月23日～8月4日、9日～12日に行われている。2ヶ所での田植が時期的に重なりあうことはないといってよい。田植が行われた多くの日に、同じ場所の水田での耕起、しろかきがみられる。耕起、しろかきは、時間帯では朝(6時～9時)、午後(2時～4時半)に集中している。朝のうち、または前日の午後に夫が耕起、しろかきをした水田の田植を、夫と妻との共同作業によって、その日のうちに終了させる作業パターンの存在が考えられる。ここでも、夫が耕起、しろかきをしているとき、妻が水田で行う作業は苗取である。

チナウォン家、ダンサイ家は夫婦を基幹労働力としている点で共通している。そして、その点を前提として以上に述べた稲作生産における夫と妻との分業、共同労働が展開している。そこでは、夫と妻とが共同で行う作業(田植、刈取など)の他に、一方が主に行う作業(耕起、苗取、脱穀など)が存在する。その夫と妻との分業には、男と女という性の違いが反映されていると考えられる。しかし、田植時期での夫の役割である耕起、しろかきが、妻の役割である苗取と同時に行われたり、夫がその役割である脱穀をしているとき、妻はその補助的な作業をすることがみられる。また、夫と妻とが共同で行う田植、刈取は最も時間を消費する作業である。結果として、夫と妻とが水田で「共に働く」ことは、当事者にとって強く認識されていると思われる。

また、ダンサイ家では脱穀場の準備、残された藁を結束し水牛の飼料として水田に集積する作業に妻がかかわっており、刈取って結束された稲の運搬作業は共同で行われている。この点はチナウォン家と異なり、稲作生産における夫と妻との分業、共同労働のあり方は、夫婦2名を基幹労働力とする世帯間でも画一的なものではない。

(3) 家族周期と世帯内分業

チャンタバン家は、労働力の点から見ると、家族周期上でチナウォン家またはダンサイ家が発展した段階にあると考えられる。すなわち、世帯主夫婦（夫54歳、妻49歳）の子供が成長し世帯の労働過程へ十分に関与しているのである。具体的には、長男（25歳）が基幹労働力となっている。そこで、チャンタバン家を事例としてとりあげ、その稲作の共同労働のあり方を分析する。

調査期間内で長男が稲作に費やしている時間は、全体としては父親と母親の1.3～1.4倍である。したがって、稲作生産における長男の労働力は世帯のなかで最も重要だと考えられる。時間の面から共同労働のパターン（誰と誰とが同時に稲作にかかわっているか）をとらえると、最も目立つのは長男が単独で稲作にかかわっているものであり、次に両親と長男の三者による共同労働である（表3）。そして、長男を含まない夫婦による共同労働が最も目立たないパターンとなっている。長男が世帯のなかで最も稲作に時間を費やしているのは、表からわかるように単独でそれにかかわる時間が多いからである。長男が単独で稲作にかかわっているとき、父親は賃金労働者として働きに出ているのが典型的である。そして、母親は家事労働もしくは野菜栽培に従事しているケースが多い。時間消費の点からみれば、母親は野菜栽培における中心的な役割を果たしている。この世帯では、父親が朝または午後に働きに出て、稲作生産に従事できない穴を長男が埋めている形が見受けられる。この点からも、チャンタバン家の稲作生産における長男の役割の重要性が指摘できる。

夫婦以外の世帯成員を考慮せずに、稲作生産における夫と妻との分業、共同労働をみると、チナウォン家、ダンサイ家と似たような実態が明らかになる。たとえば、耕起、しろかき、収穫した稲の結束、竹ひも作りは、夫の仕事、苗取は妻の仕事であり、田植、刈取には両者が共にかかわることが顕著になっている。

しかし、すでに述べたように夫婦のみが共同労働をするよりは、それに長男が加わることが圧倒的に多い。したがって、田植、刈取は夫婦と長男の三者による共同作業の色彩が強くなる。また、長男は父親の仕事である耕起、収穫した稲の結束にかかわっているが、母親の仕事である苗取はほとんど行っていない。脱穀は、チナウォン家、ダンサイ家では夫が行っていたが、この世帯の場合長男が中心となって行っている。

以上のことから、チャンタバン家の稲作生産における成員間の分業、共同労働のあり方は、家族周期上では前段階にあるチナウォン家、ダンサイ家を基本とし、基幹労働者となった長男が、父親の役割を補うかあるいは全面的にそれを行なう形をとることによって変形されたものといえる。

(4) 近親の世帯間共同の事例分析

世帯の労働過程へ十分に関与できるようになった成長した子供は、いずれ結婚して、しばらくは親と同居したとしても、やがて新しい世帯を形成する。そして別居の親世帯と子世帯とがまるで一世帯のように生産面での共同関係を行う場合がある⁽¹²⁾。生活時間調査におけるこのような事例は、83年調査の中にはなく、81年調査のK世帯とU世帯との関係にみられるので、ここではこの2世帯をとりあげる。図9に2世帯の関係を示す。K世帯の妻は、U世帯の世帯主の長女であり、隣接して居住している。また、K世帯は農地、米倉を所有せず、夫と妻はU世帯の農地でその成員と共に働き、そこからの生産物を得ている[Fukui et al. 1983:293]。

U世帯とK世帯の成員の労働時間配分(表4)から、稲作はU世帯の世帯主(U1)、次女(U3)、三女(U4)、そしてK世帯の妻(K2)によって主に営まれているのがわかる。K世帯の夫(K1)が稲作にあまり従事しないのは、東北地域農業センターの農業労働者として働きに出ているためである。また、生産物のマーケティングを含めて、菜園を中心となって経営するU世帯の妻(U2)は、その分だけ稲作に従事する時間が少なくなっている。以下では、稲作生産を例にとってU世帯とK世帯との生産面での共同関係を分析する。なお、調査期間は、田植時期の後半から刈取・脱穀の時期までである。

稲作での田植、刈取は、主として[K2, U3, U4]、または[K2, U3]の組合せ、つまり姉妹による共同作業である(表5, 表6)。ここに、世帯の枠を越えた共同労働の実例をみることができる。調査期間中、K2はU世帯、K世帯の全成員のなかで稲作での労働時間が最も多く、このような姉妹による共同作業でも中心的な役割を果たしている。この場合、上記の組合せにU1が加わることは非常に少なく、田植、刈取に投入される時間量もK2, U3, U4に比べてかなり少なくなっている。

しかし、作業別でみなければ、K2, U1, U3, U4が同時に稲作生産にかかわっているパターンが最も頻繁にみられる。例えば、姉妹が田植、刈取をしているとき、U1は同時期に行われる別の作業(耕起、しろかき、収穫した稲の結束など)に従事していることが多い。稲作の主な作業別に、K2, U1, U3, U4の労働投入時間をみたのが表7である。作業別の労働投入パターンは、上記の結果として姉妹が相互に似かよっており、U1のパターンと区別される。したがって、表7の4サンプルのうちU1のみが男子であることもあって、U世帯とK世帯との稲作共同経営での分業は基本的に姉妹からなるグループとU1との間で体系づけられていると考えられる。

5. おわりに

生活時間調査は、通常不特定多数のサンプルの分析にもとづいて、生活の一般像を抽出することを特色としている。しかし、本稿で我々が試みた村落生活の分析方法は、少数サンプル（農民，農家）の生活を包括的かつ定量的に把握するものである。調査データ自体から村落生活の一般像を得ることはできないが、すでに明らかにされた村落生活に関する事実を時間利用の点からきわめて具体的に例示することができる。

本稿は、2回にわたる生活時間調査の第一報にあたる。「誰と」行動したかに関するデータを用いて、ドンデーン村、そして村の領域を越えた社会関係・人間関係を様々な局面から把握することなど、残された課題は多い。これらのデータの分析、整理に際しては、生活時間調査以外のデータを用いて、課題の多面的解明を試みたい。

注：

1. 京都大学大型計算機センターを利用した。またこの入力、分析の費用の一部は日本経済研究奨励財団の助成によった。
2. サンプル20人のうち、仕事と生理的必要時間の区別がつかない村外勤務者3人は計算から除いた。その3人は後述のパクバン家の妹、チャンタバン家の世帯主、ラトロムアン家の長男である。
3. 1981年の全戸調査におけるシリアルナンバーとハウスナンバー[Fukui et al. 1983:187]。
4. 労働および食事を共に行って、生計を共にすること。現地語では「ヘットナムカン、キンナムカン」という。
5. 共同耕作分の面積も含む。
6. 勤務時間は8時間と短かいので、勤務時間外に農業センターで睡眠をとり、昼間に農業に従事することができる。しかし定期的な休日はない。
7. 調査期間中の1983年11月に病に倒れ、1984年2月まで床に伏したままであり、農業、精米業はもとより村長の仕事も代行してもらっていた。1984年3月には軽い仕事はこなせるまでに回復した。
8. 値は世帯の各成員がその労働へ投入した時間を合計したもので、各旬の一日平均で示してある。
9. この労働力の不足は雇用労働でおぎなったと考えられるが、データが未分析のため詳しいことはわかっていない。
10. キャサバ栽培には雇用労働を使うことが多いが、ここでは自家労働力のみについて論じている。
11. 後述する放牧時間の性格を考慮し、ここでは放牧のみをしている時間を計上した。
12. 水野浩一がいうところの「屋敷地共住集団」[水野 1981]を指す。

参考文献：

青井和夫；松原治郎；副田義也編 1971. 「生活構造の理論」 東京：有斐閣

Binswanger, H. P.; Everson, R. E.; Florecio, C. A.; and White, B. N. F. eds. 1980. Rural household studies in asia. Singapore: Singapore University Press.

Carlstein, Tommy 1982. Time resources, society and ecology: on the capacity for human interaction in space and time in preindustrial societies. Lund studies in geography, Ser. B. Human geography 49. Sweden: The Royal University of Lund.

Fukui, H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. 1983. An Interium Report/ A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

Johnson, Allen W. 1978. Quantification in cultural anthropology: an introduction to research design. California: Sanford University Press.

水野浩一 1981. 「タイ農村の社会組織」 東京：創文社

N H K放送世論調査所編 1981. 「昭和55年度国民生活時間調査 全国編」 東京：日本放送出版協会

Whiting, B. B.; and Whiting, J. W. M. 1975. Children in six cultures: a psycho-cultural analysis. Cambridge and Massachusetts: Harvard University Press.

表1. 田植時における夫と妻の分業(チナウォン家、末娘夫婦)

妻	夫	耕起	しろかき	あぜ修復	苗取	食物運搬	田植	その他	妻・計
苗取		166	19	51	6	0	30	74	346
食物運搬		9	18	3	2	0	6	56	94
田植		0	0	0	0	0	308	38	346
その他		79	28	25	13	17	50	--	212
夫・計		254	65	79	21	17	394	168	

注 表中の数字は時間量を示す(単位は10分)。

表2. 稲刈時における夫と妻の分業(チナウォン家、末娘夫婦)

妻 夫	竹ひも作り	刈取	結束	運搬	脱穀場準備	解束	脱穀	その他	妻・計
稲の倒伏	12	0	0	0	0	0	0	0	12
刈取	0	867	45	6	6	0	18	234	1176
運搬	0	0	0	30	0	6	30	12	78
解束	0	0	0	0	0	36	78	30	144
種籾選別	0	0	0	0	0	0	96	48	144
その他	85	117	76	66	24	0	120	--	488
夫・計	97	984	121	102	30	42	342	324	

注 表中の数字は時間量を示す(単位は10分)。

表3. 時間の面からみた共同労働(チャンタバン家)

パターン番号	世帯主	妻	長男	時間量
1	*			460
2		*		332
3			*	980
4	*	*		288
5	*		*	328
6		*	*	360
7	*	*	*	806
合計労働時間	1877	1781	2469	

注). *印はその者が稲作をしていることを示す
単位は10分

表4. U世帯とK世帯の成員の労働時間配分

労働内容	成員							
	U 1	U 2	U 3	U 4	U 5		K 1	K 2
家事労働	19	233	473	234	322		7	437
稲作	426	200	508	421	16		131	571
畑作	0	0	0	0	0		0	11
野菜作	67	724	397	236	50		23	167
家畜飼育	1235	55	404	392	183		109	574
魚取り	127	5	15	2	0		483	2
狩猟・採集	24	38	77	40	2		167	17
賃金労働	0	0	0	0	0		1887	0
手仕事	1	262	47	26	33		0	39
マーケティング	3	631	30	37	7		0	5

注). 成員の記号は本文を参照のこと、U 5はU世帯の末娘
単位は30分で調査期間の合計時間を示す

表5. 田植時における共同労働 (U世帯, K世帯)

パターン番号	K 2	U 1	U 3	U 4	時間量
1	*				22
2		*			6
3			*		14
4				*	6
6	*		*		10
7	*			*	6
10			*	*	8
11	*	*	*		8
13	*		*	*	40
15	*	*	*	*	4
合計労働時間	90	18	84	64	

注). *印はその者が稲作をしていることを示す
単位は30分

表6. 稲刈時における共同労働 (U世帯, K世帯)

パターン番号	K 2	U 1	U 3	U 4	時間量
1	*				56
3			*		36
4				*	17
5	*	*			1
6	*		*		104
7	*			*	30
8		*	*		1
10			*	*	27
11	*	*	*		5
13	*		*	*	122
14		*	*	*	2
15	*	*	*	*	11
合計労働時間	329	20	308	209	

注). *印はその者が稲作をしていることを示す
単位は30分

表7. 稲作の作業別労働投入時間 (U世帯, K世帯)

作業	U 1	U 3	U 4	K 2
苗取	8	19	33	28
耕起	50	5	2	4
しろかき	30	7	0	1
田植	18	85	64	90
刈取	20	308	209	329
竹ひも作り	18	0	2	0
稲の結束	137	43	2	0
稲の運搬	33	43	58	48
脱穀場の準備	23	6	0	0
脱穀	16	0	0	0
あぜきり	31	0	0	3

注). 単位は30分

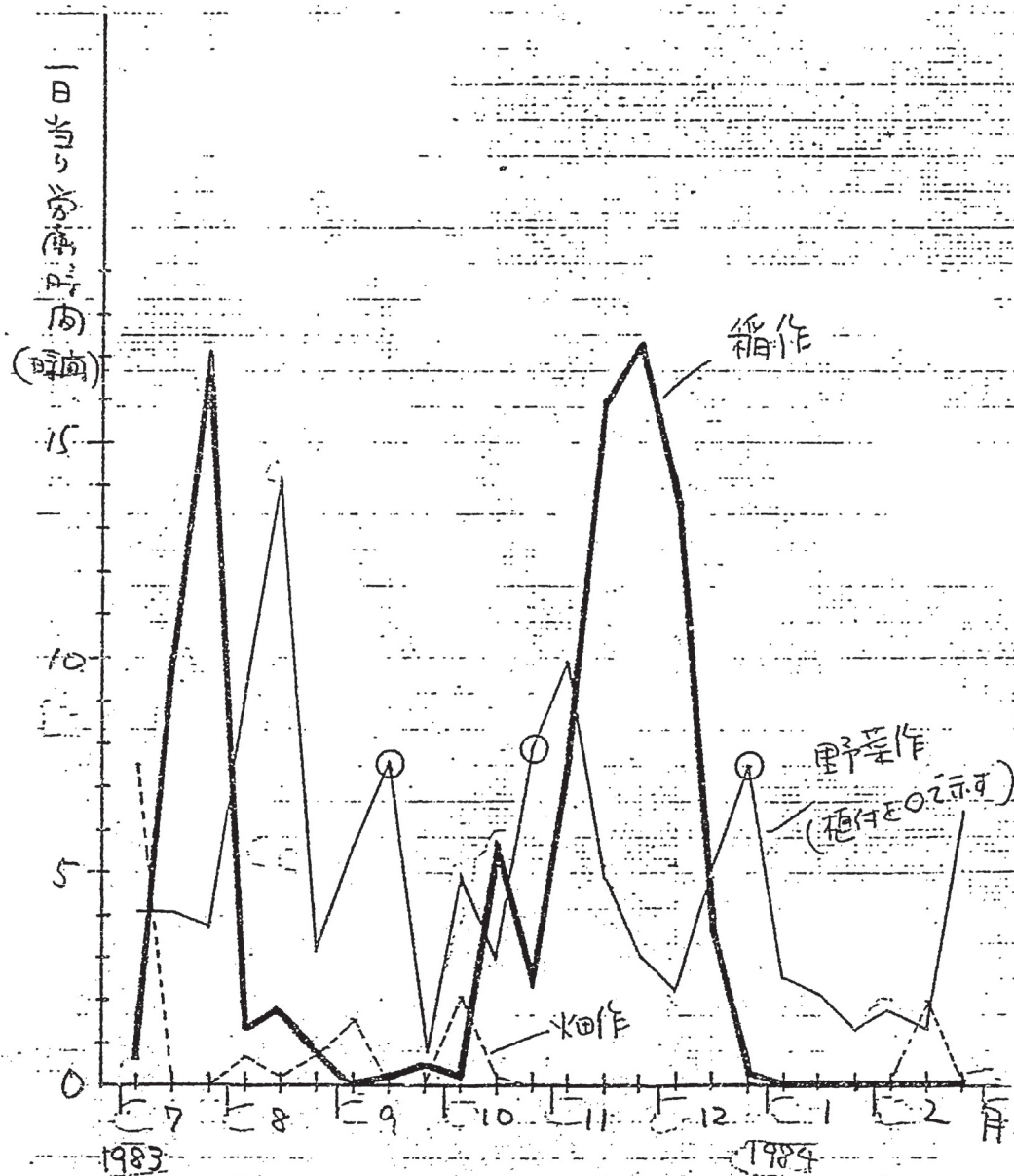


図1 作物生産労働時間の季節的変動
(千代田県)

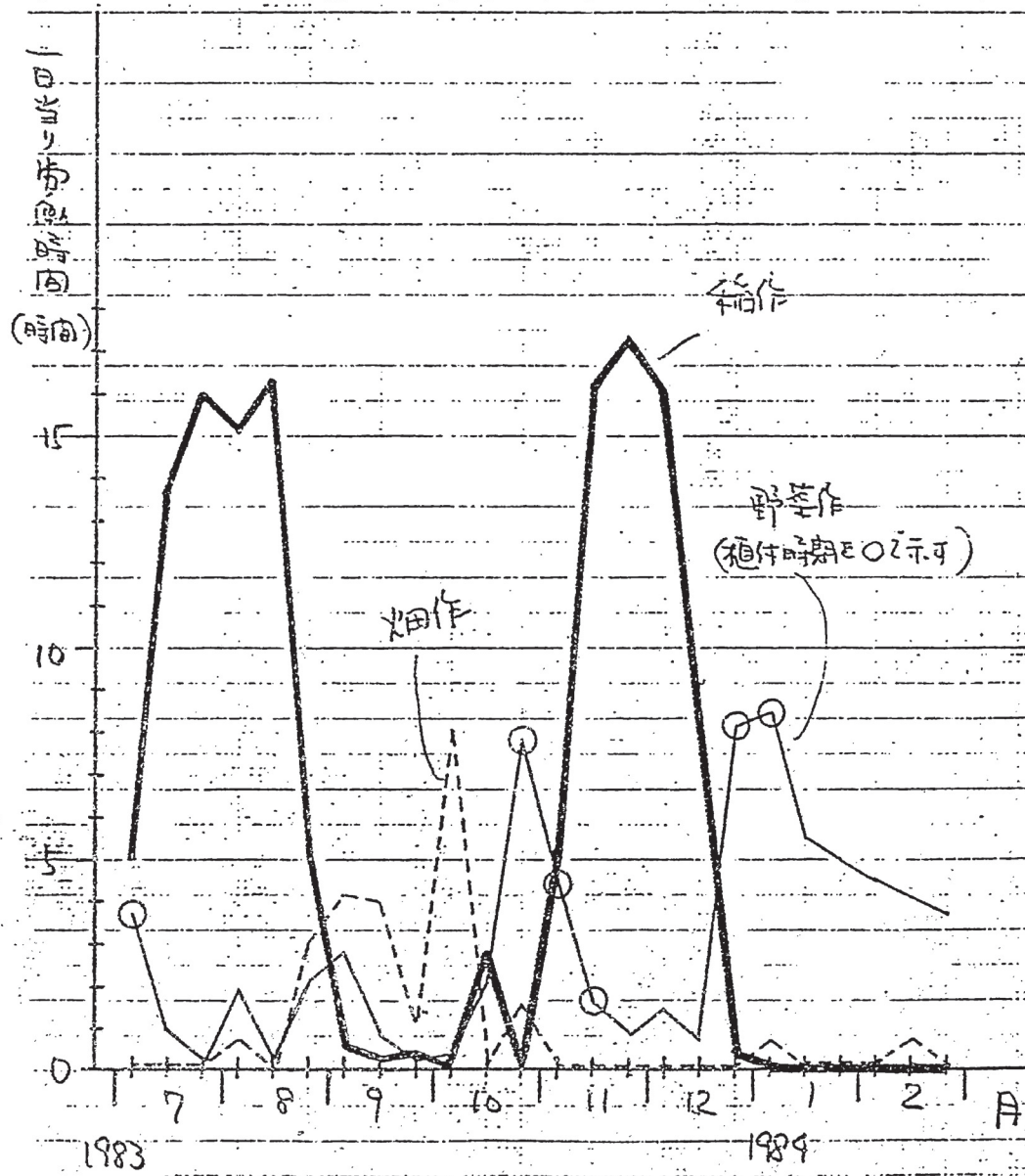


図2 作物生産労働時間の季節的変動
(タバコ家)

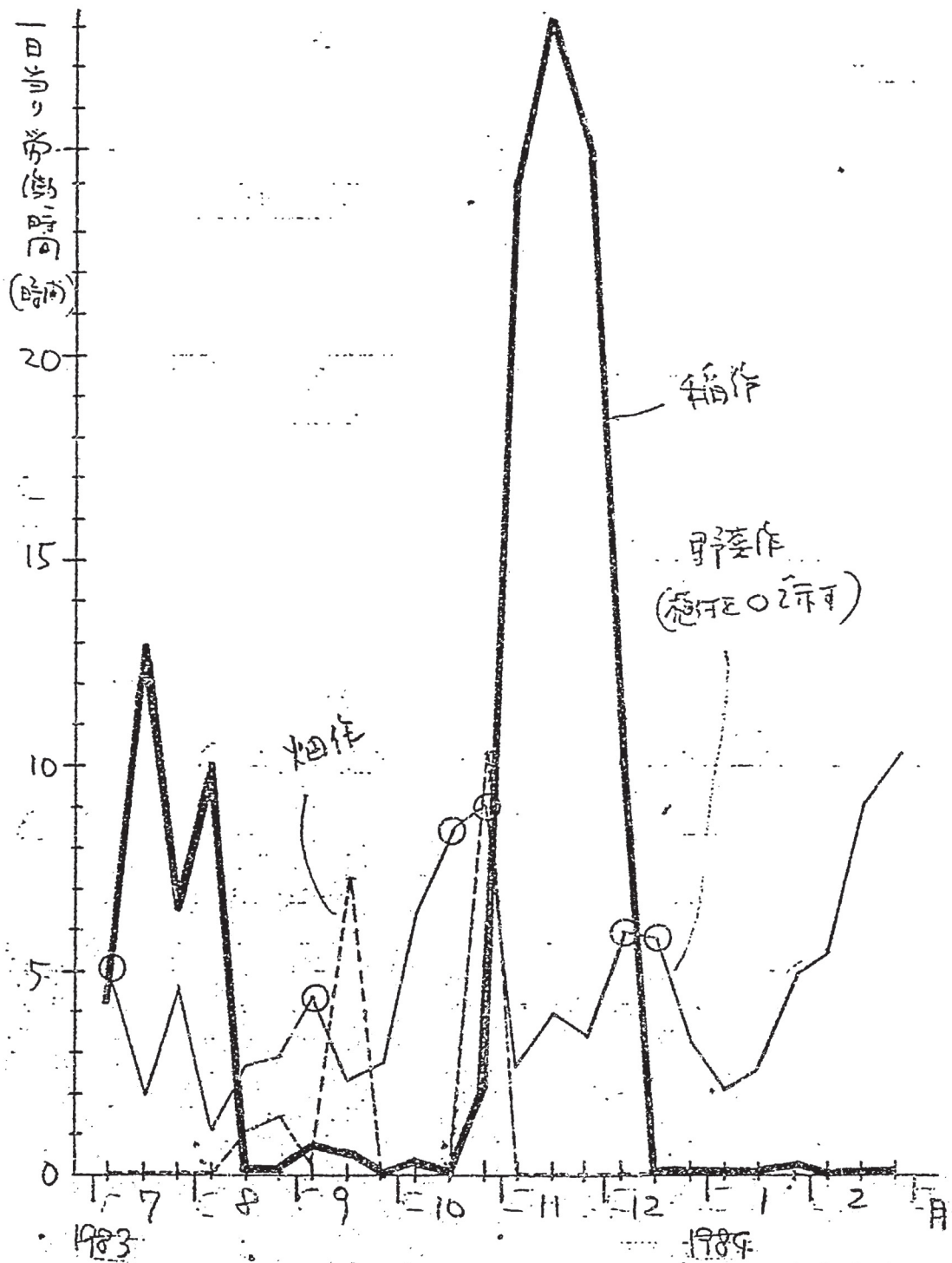


図3. 作物生産労働時間の季節的変動
(千時間)

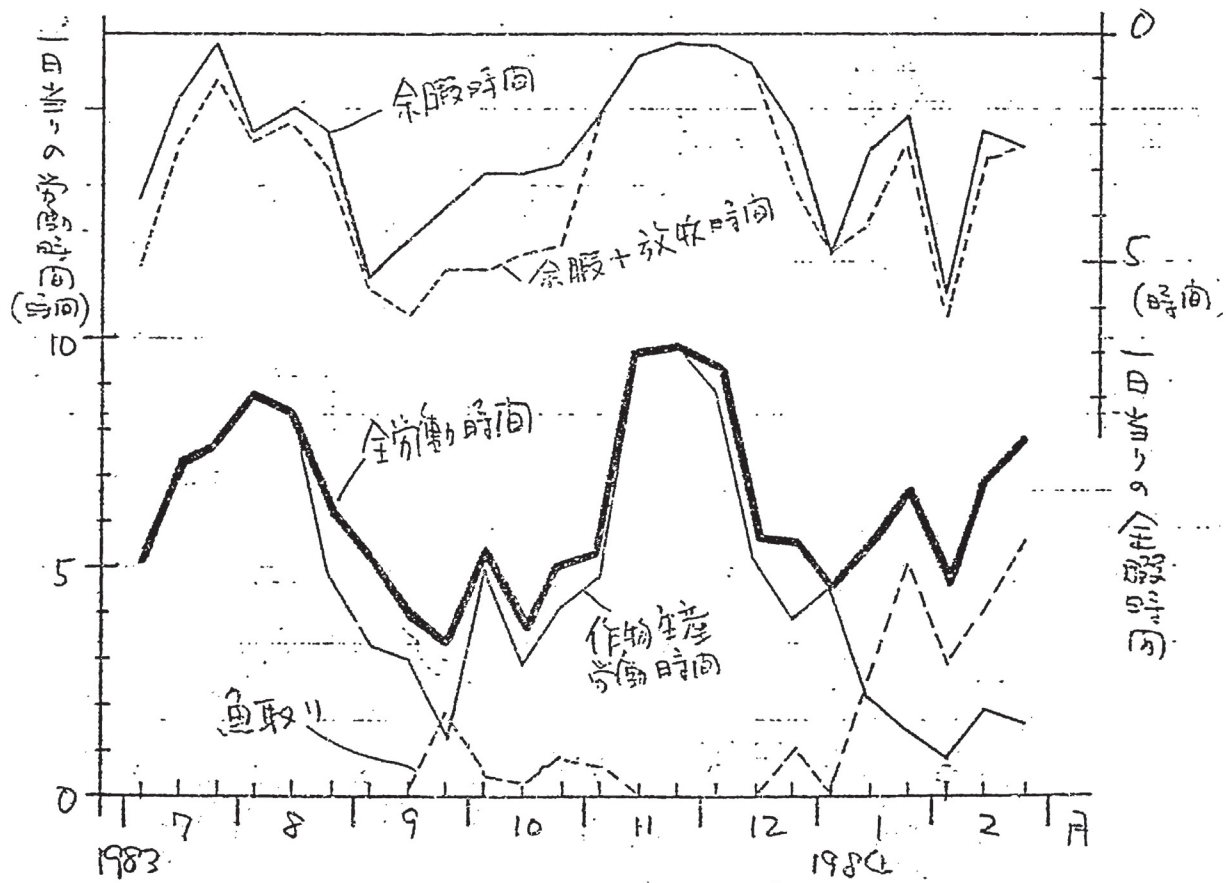


図4. 生活時間の季節的変動 (ササ家、世帯主)

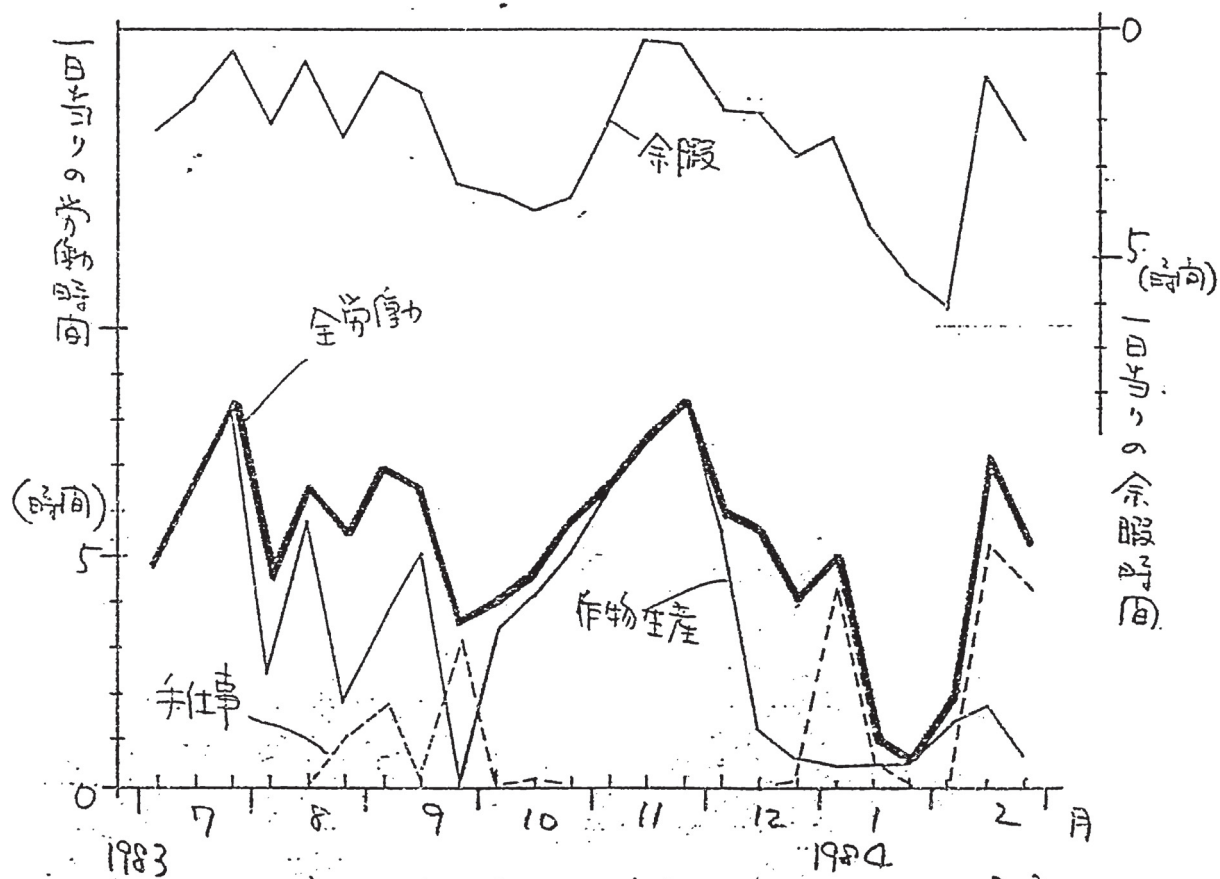


図5. 生活時間の季節的変動 (千代子家、未婚)

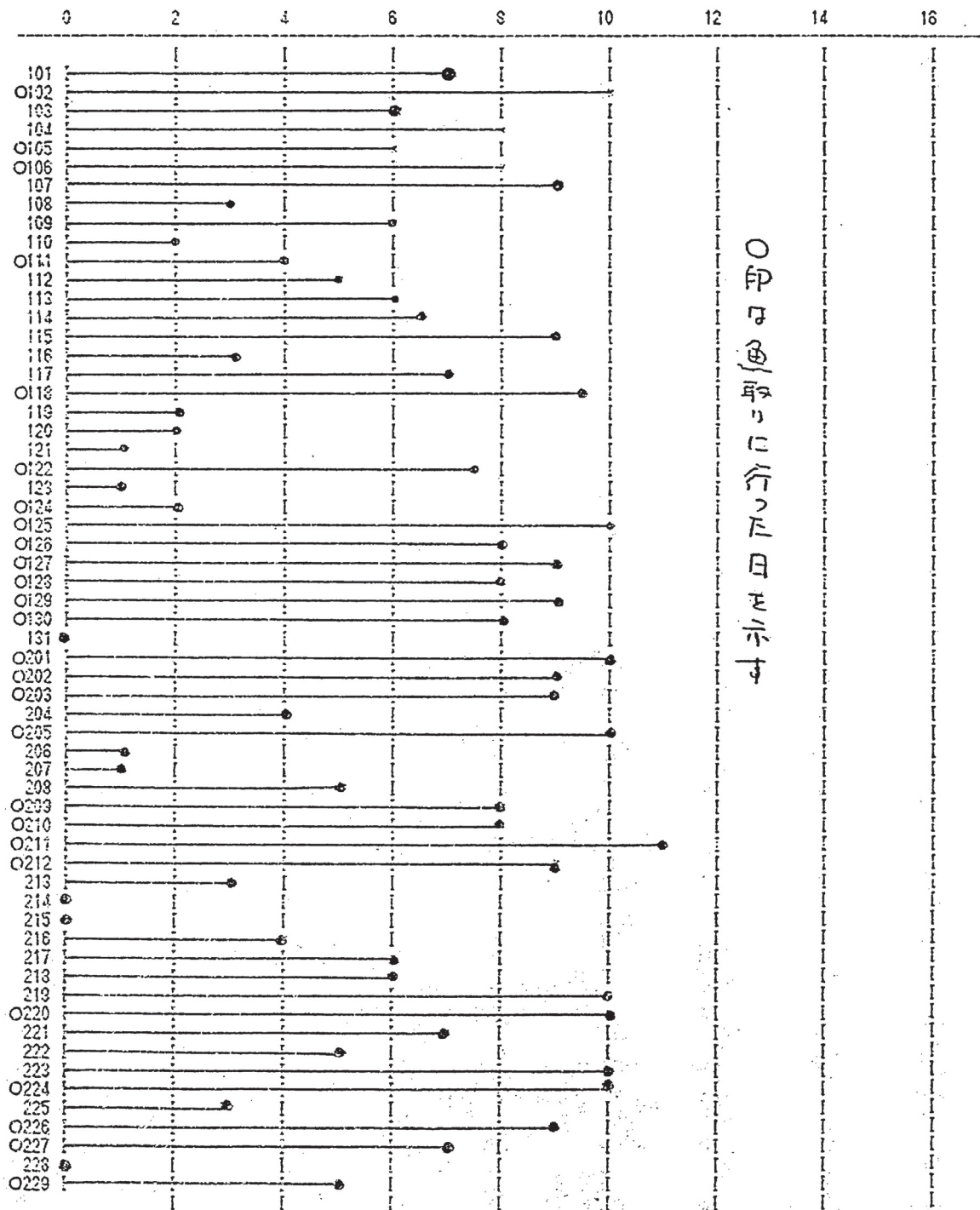


図6. 乾季における労働時間の変化 (ナナノ家, 札幌)

図 7

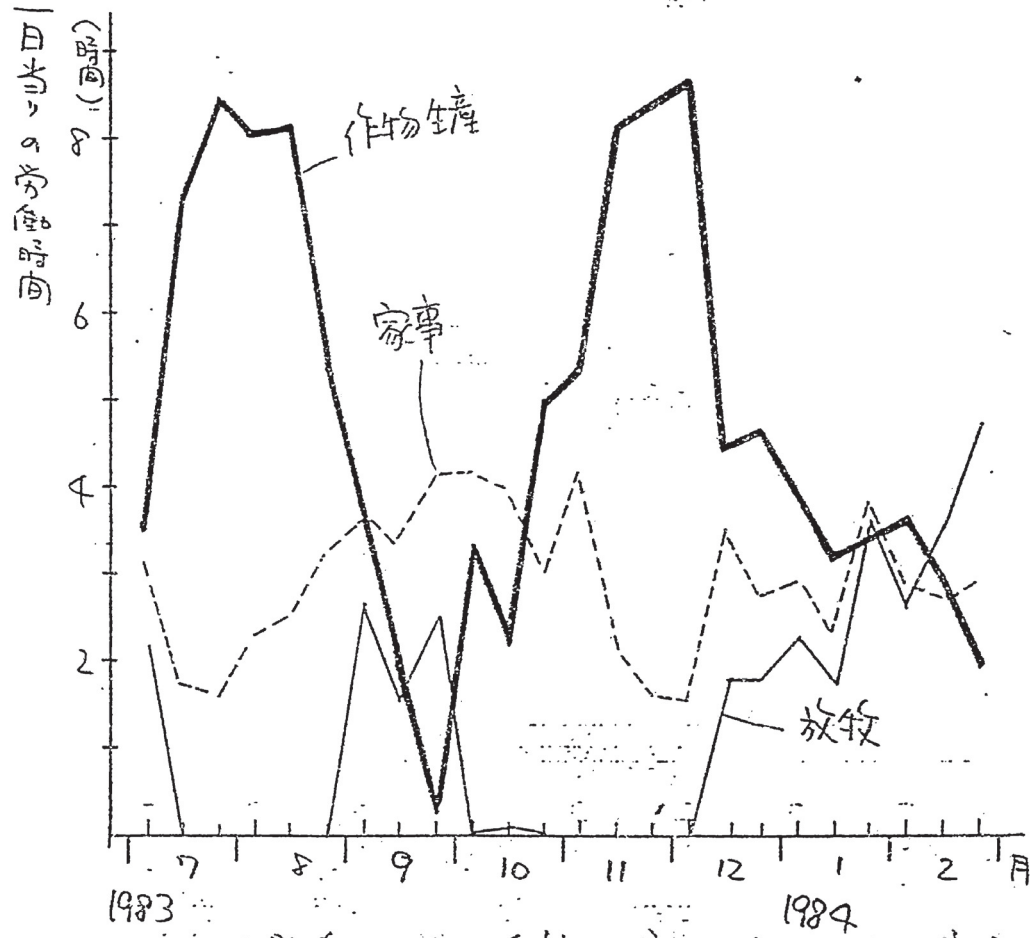


図 7. 労働時間の季節的変化 (ダンサイ家、妻)

図9

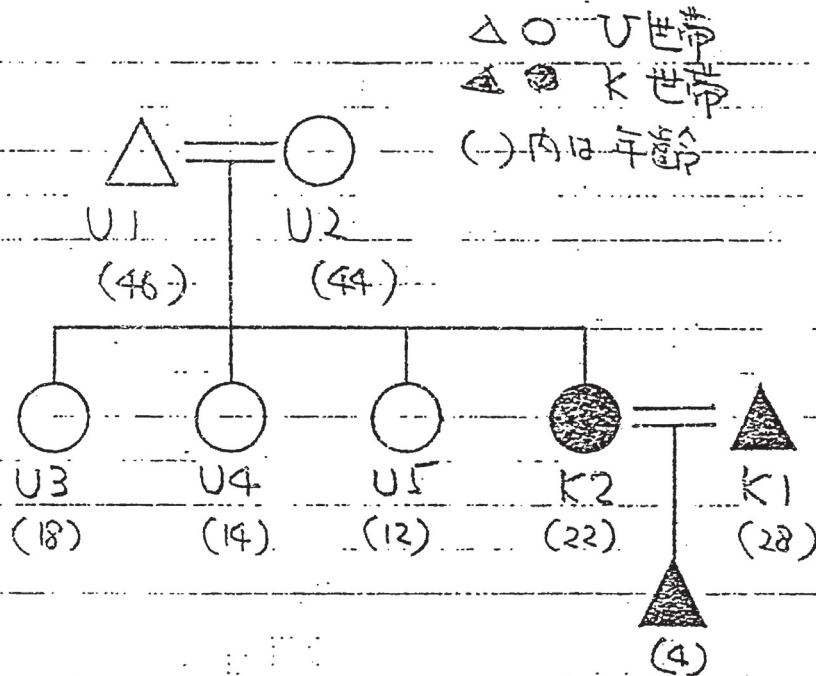


図9. U世帯とK世帯

図8 は Second Interum P.281 (最後のページ)、

Fig 11-12 と 10.1